

2022年5月22日(日) 8課 使徒言行録 26章19～32節

週題: 「鎖につながれながら」

暗唱聖句: しかし、神の言葉はつながれていません。

2テモテ 2章9節

26:19 「アグリッパ王よ、こういう次第で、私は天から示されたことに背かず、

26:20 ダマスコにいる人々を初めとして、エルサレムの人々とユダヤ全土の人々、そして異邦人に対して、悔い改めて神に立ち帰り、悔い改めにふさわしい行いをするようにと伝えました。

26:21 そのためにユダヤ人たちは、神殿の境内にいた私を捕らえて殺そうとしたのです。

26:22 ところで、私は神からの助けを今日までいただいて、固く立ち、小さな者にも大きな者にも証しをしてきましたが、預言者たちやモーセが必ず起こると語ったこと以外には、何一つ述べていません。

26:23 つまり私は、メシアが苦しみを受け、また、死者の中から最初に復活して、民にも異邦人にも光を語り告げることになると述べたのです。」

26:24 パウロがこう弁明していると、フェストゥスは大声で言った。「パウロ、お前は頭がおかしい。学問のしすぎで、おかしくなったのだ。」

26:25 パウロは言った。「フェストゥス閣下、わたしは頭がおかしいわけではありません。真実で理にかなったことを話しているのです。

26:26 王はこれらのことについてよくご存じですので、はっきりと申し上げます。このことは、どこかの片隅で起こったものではありません。ですから、一つとしてご存じないものはないと、確信しております。

26:27 アグリッパ王よ、預言者たちを信じておられますか。信じておられることと思いません。」

26:28 アグリッパはパウロに言った。「短い時間でわたしを説き伏せて、キリスト信者にしてしまうつもりか。」

26:29 パウロは言った。「短い時間であろうと長い時間であろうと、王ばかりでなく、今日この話を聞いてくださるすべての方が、私のようになってくださることを神に祈ります。このように鎖につながれることは別ですが。」

26:30 そこで、王が立ち上がり、総督もベルニケや陪席の者も立ち上がった。

26:31 彼らは退場してから、「あの男は、死刑や投獄に当たるようなことは何もしていない」と話し合った。

26:32 アグリッパ王はフェストゥスに、「あの男は皇帝に上訴さえしていなければ、釈放してもらえただろうに」と言った。

● ショートメッセージ

(文責・H.I)

本日の聖書箇所には、パウロの回心後の、福音を宣べ伝えるのだ、という決断の強さが窺えます。しかしパウロのその強い意志については聖書では語られていません。回心の出来事については、ここ使徒言行録 26 章 12 節以下以外でも、9 章 1 節～19 節、そして 22 章 6 節～16 節に書かれています。しかしそこでは、突然の強い光がパウロの周りを照らし、彼が地面に倒れると「サウル、サウル、なぜ、わたしを迫害するのか」と呼びかける声が聞こえ、「主よ、あなたはどなたですか」と彼が訊ねると、「わたしは、あなたが迫害しているイエスである。」との答えがあった、という出来事が書かれているのみです。(この時の「主よ」は、まだ「ご主人さま」というような意味で呼びかけられていると考えられます。)

22 章 10 節でパウロは言います。『主よ、どうしたらよいでしょうか』と申しますと、主は、『立ち上がってダマスコへ行け。しなければならないことは、すべてそこで知らされる。』と言われました。(ここでの「主よ」は、もう「イエスさま」への呼びかけになっています。) しかし続く 22 章 11 節でも、「わたしは、その光の輝きのために目が見えなくなっていましたので、一緒にいた人たちに手を引かれて、ダマスコに入りました。」と、やはり出来事のみが書かれています。唯一パウロの「思い」が語られている聖書箇所は、ガラテヤ人への手紙 1 章 16 節～17 節の「(神さまが) 御子をわたしに示して、その福音を異邦人に告げ知らせるようにされたとき、わたしは、すぐ血肉に相談するようなことはせず、また、エルサレムに上って、わたしより先に使徒として召された人たちのもとに行くこともせず、アラビアに退いて、そこから再びダマスコに戻ったのでした」であり、そこでもパウロは、ごく簡潔に言葉少なに語るのみです。ユダヤ教徒であったパウロの回心は、奇跡的な「改宗」ではなく、イエスさまの福音を宣べ伝えるのだ、という決断であると同時に、彼の「心に」示された神さまからの「召命」ともいうべき出来事であったのでしょうか。ダマスコでのパウロの積極的な宣教活動は、まずはユダヤ人たちを刺激して政治的な問題へと発展していきましたが、そのことは、イエスさまの活動がユダヤの指導者たちの目に留まりローマの権力者たちが見過ごすことのできない政治問題へと発展したと類似しています。

エルサレムでユダヤ人たちに捕らえられたパウロは、ローマ権力によって、カイサリアに護送され監禁されていました。生まれながらにしてローマの市民権を持っていたパウロ(使徒言行録 22 章 28 節など)の裁判は、ローマ権力によってのみ行われることができたのです。しかし、ローマからユダヤに遣わされていた総督フェリクスは、二年もの間パウロを尋問せず、牢につないだままでした。後任の総督フェストゥスは、着任後の三日目に、カイサリアからエルサレムに上りましたが、パウロの尋問は、その総督フェストゥスがエルサレムからカイサリアに戻って来てから行われました。時を同じくして、総督と共にユダヤを統治していたアグリッパ王が、妹ベルニケを連れだつてフェストゥスに敬意を表す

ために、カイサリアに来ました。アグリッパ王は、ローマ皇帝の判決を受けるまでここにとどめておいて欲しいと願っていたパウロの謁見に、翌日伴いました。ユダヤ人たちからは、もう生かしておくべきではない、と言われたパウロではありましたが、「死罪に相当するようなことは何もしていないということがわかった」、とフェストゥスは言います。アグリッパ王はパウロに、「お前は自分のことを話してよい」と言います。そしてパウロは、かつてユダヤ教の中でもいちばん厳格なファリサイ派の一員であったこと、そのためにナザレ人イエスがメシアだとはわからずにイエスを冒瀆し、聖なる者たちを罰して迫害したことを話します。しかし、回心によって、イエスさまこそが旧約の神がお与えになった約束の実現なのだということがわかった、と弁明します。

聖書では言葉少なに語るのみのパウロの回心ですが、イタリア・バロックを代表する画家カラヴァッジョによる「聖パウロの回心」では、突然の天からの強い光に馬から転げ落ちて両手を広げて地面に倒れたパウロに、聖なる光が当たっています。まるでスポットライトのように描かれたその光とは対照的に、周囲の暗さも描かれています。この明暗は、イエスさまの声を聴いて回心するパウロの前と後とを表現していると思われます。この絵は、ローマのサンタ・マリア・デル・ポポロ聖堂の祭壇画として描かれた作品です。パウロの回心は、祭壇画として描かれるほどに、神からの祝福であり召命であったのだということが窺えます。そして、私たちが今この絵を見ることでもって、神からの祝福に与るという体験をすることができます。

パウロはアグリッパ王に、自分は、ダマスコにいる人々、エルサレムの人々、ユダヤ全土の人々、異邦人に対して、「悔い改めて神に立ち帰り、悔い改めにふさわしい行いをするようにと伝えました。そのためにユダヤ人たちは、神殿の境内にいた私を捕らえて殺そうとしたのです。」という弁明と、「私は、メシアが苦しみを受け、また、死者の中から最初に復活して、民にも異邦人にも光を語り告げることになる。」という弁明をします。しかしその弁明を聴いていた総督フェストゥスの反応は、「パウロ、お前は頭がおかしい。学問のしすぎで、おかしくなったのだ。」というものでした。フェストゥスには神の啓示とか、死者からの復活など、とうてい理解できなかったのでしょうか。しかし、アグリッパ王は、弁明している時のパウロに何回か「王よ」と呼びかけられ、パウロの話していることの多くを理解していたので、次のように応えました。「短い時間でわたしを説き伏せて、キリスト信者にしてしまうつもりか。」と。するとパウロは、「短い時間であろうと長い時間であろうと、王ばかりでなく、今日この話を聞いてくださるすべての方が、私のようになったださることを神に祈ります。このように鎖につながれることは別ですが。」と応答します。

パウロは、福音を宣べ伝えるだけではなく、自らの内にある光であるイエスさまの栄光を見て欲しいと思っていたのでしょうか。コリントの信徒への手紙一 11 章 1 節には、「わた

しがキリストに倣う者であるように、あなたがたもこのわたしに倣う者となりなさい。」とあります。この言葉にあるように、私たちは日々の自分を振り返り、罪を告白し、パウロに倣う者となれるよう、神さまが差し伸べてくださるみ手を離さないようにしたいと思います。そして、犯罪人のように鎖につながれているパウロではありますが、「神の言葉はつながれていません」と語る彼の言葉を大切にしたいと思います。あらゆることを耐え忍んでくれたパウロにより、福音につながる事ができている私たちは、救いと栄光に与るといふ恵みをいただいているのです。アグリッパ王が「あの男は皇帝に上訴さえしていなければ、釈放してもらえただろうに」と語ったほどに、パウロは自らの命を賭して、私たちに「悔い改めて神に立ち帰り、悔い改めにふさわしい行いをするように」と語りかけてくださっているのです。

ただし、今回のパウロの回心の出来事を見ると、私たちがしばしば考えがちな、「悔い改めるからゆるされるのだ」という考え方を、私たちはしっかりと捉え直す必要があると思います。キリスト教徒を迫害していたパウロは、そのことを悔い改めたからゆるされたのではありませんでした。むしろまったく逆に、その迫害のただなかで、パウロの悔い改めにはるかに先立って、神さまの愛とゆるしが、無条件に与えられているということが、イエスさまからパウロに示されたのでした。悔い改めることはとても大切なことですが、その悔い改めに先立って神さまの愛とゆるしが与えられているからこそ、私たちは悔い改めるのだ、という順序を、私たちはしっかりと押さえておく必要があるでしょう。

#### ● 分かち合い

- ・悔い改めと聞いた時、どのようなことを思い浮かべますか？
- ・日々のお祈りで、欠かさず神さまにお願いすることはありますか？

#### ● 次週の予告

「ともに元気に」と題して使徒言行録 27 章 13 節～38 節から読みます。  
今週の「聖書日課と分かち合い」で、日々み言葉をいただきましょう。